

## 66 経静脈的塞栓術が有効であった舌下神経管内硬膜動静脈瘻の1例

新井 良和・石井 久雄・上田 佳史  
半田 裕二・久保田紀彦・白崎 直樹\*  
能崎 純一\*

福井医科大学脳神経外科  
公立加賀中央病院脳神経外科\*

硬膜動静脈瘻は、硬膜に異常な動静脈吻合を生じることにより多彩な症状を呈する疾患であり、海綿静脈洞部および横静脈洞・S状静脈洞部に好発するが、舌下神経管内硬膜動静脈瘻は過去に5例の報告があるのみで稀である。臨床的には耳鳴り・頭痛で発症することが多く、また海綿静脈洞へのシャント血流の流入があれば眼症状も呈する。今回我々は耳鳴り・眼症状で発症した舌下神経管内硬膜動静脈瘻に対し、経静脈的塞栓術を行い良好な結果を得た1例を経験したので、若干の文献的考察を加え報告する。症例は64歳、男性。平成14年8月頃より耳鳴り、9月に入り両側結膜充血、複視出現。近医受診し頭部MRI、脳血管撮影にて異常を認め10月25日当科紹介となった。神経学的には両側眼球突出、左視力低下、右外転神経麻痺、両側眼圧上昇、左後頭部に血管雑音を認めた。脳血管撮影上、下錐体静脈洞と頸静脈洞の合流点の内側下方にあたる左舌下神経管内で、主に左上行咽頭動脈、左椎骨動脈の硬膜枝を栄養動脈とし、左内頸静脈、左下錐体静脈へ導出する動静脈シャントを認めた。10月31日、コイルによる経静脈的塞栓術を行い、術直後より耳鳴りは消失し、数日後には結膜充血、眼球運動障害も改善した。1ヶ月後の脳血管撮影でも再発を認めず独歩退院した。

## 67 脊髄硬膜動静脈瘻に対する塞栓術

久保 道也・桑山 直也・山本 博道  
長谷川真作・平島 豊・遠藤 俊郎  
富山医科薬科大学脳神経外科

【目的】塞栓術を行った脊髄硬膜動静脈瘻5例について検討を加え、その血行動態および患者背景の特徴と血管内治療の有用性について報告す

る。

【対象】塞栓術を行った脊髄硬膜動静脈瘻5例(男4,女1;平均71.4歳)で、発症様式はいずれも脊髄静脈還流障害による進行性対麻痺であった。瘻の高位は、L2:2例, L3:1例, L4:1例, S1:1例であった。流入動脈は、腰動脈L2+3:2例, L2:1例, L4:1例, 外仙骨動脈1例であった。5例ともperimedullary veinに上向きに流出し、内・外椎骨静脈叢にも流出を伴うものがそれぞれ2例ずつあった。また2例にvenous pouchを伴っていた。患者背景として、腰椎脊柱管狭窄症に対する手術歴が3例にあったが、何れも症状の改善が得られなかった。他の2例では腰椎麻酔手術や腰椎圧迫骨折の既往が発症前3-6ヵ月にあった。

【結果】マイクロカテーテルを瘻の可及的近位に進めて塞栓を行った。NBCAを用いた4例は僅かに瘻を越え静脈側にいたるような塞栓を原則とし、流入血管の蛇行が強い1例はコイルでfeeder occlusionを行った。いずれも血管撮影上AVFは消失した。罹病期間の短い2例では対麻痺は著明に改善したが、罹病期間の長い3例は症状の改善は得られなかった。合併症は1例もなかった。

【結論】脊髄硬膜動静脈瘻に対する塞栓術は、有用かつ安全な治療法と考えられた。本疾患は早期発見が予後を左右するため、他科との連携が重要であると考えられた。

## 68 クモ膜下出血にて発症した頭蓋頸椎移行部硬膜動静瘻(dAVF)の2例

渡辺 秀明・阿部 博史・遠藤 浩志  
立川総合病院脳神経外科

頭蓋頸椎移行部のdAVFは比較的稀な疾患であり、脊髄症状やクモ膜下出血として発症することが多いとされている。治療としては外科的直達手術が行われることが多い。今回我々はクモ膜下出血で発症した頭蓋頸椎移行部dAVF2例を血管内手術により治療を行ったので報告する。

【症例1】70才、女性。頸部、後頭部痛で発症。